重修真書太閤記

八編

十

13
450
80

へ13 ヲ
門 4 5
號 459
卷 80

消印
福永

中川瀬兵衛尉主従戰の事
并神戸兵左衛門中川の砦を焼事

大岩山の砦いまさ補理おもらされ共是を戍りて一足も引じと勇み進む中川瀬兵衛尉清秀今年四十三歳血氣已ゝ盛ゝ騰蛇の雲を起し奮虎の翼を生せしが如く勢猛く切て廻り突てかゝれば是を破りて北國勢の氣を助け大將を打取て日ごろの荒言を聞かんと競ひ戰ふ佐久間玄蕃允盛政いまだ三十ゝ足らぬ若武者なり醉とる象の浪を蹴

同攻會印

立て狂へる獅子の巖を傳ふもかくやらんと敵味
方の目を驚かしく攻れバ擊うてハ攻一進一退一
龍一蛇と爭ふども勝負つかず双方牛角ハ追つ
返しつ去ハ〳〵時をうつり然るハ佐久間が
先陣拜郷五左衛門尉度々の戰場を經て軍ハるれ
たる勇士なれバ中川瀨兵衛尉と玄蕃允といどみ
爭ふその間をかけぬけ大岩山の砦へ向ひ岩くし
て武く勇めるを中川ハ就て打出つらん殘りて砦
を戍るハ老さる者の羸れしるらめと推量し塀際
ハ乘ㄉてこれを引破らんとおめき叫で攻立々々
あ〳〵つれども砦の中より鎗長刀をいてうち拂ひ
さりてくらひ大木大石をなげかけくふせぎしろバ
拜郷が支度案ハ相違しすこし攻口をゆるめる
ハ中川瀨兵衛の郎等ハ辻喜太夫古田五左衛門市
浦六藏らんごを初とし〳〵一騎當千の勇ㄉの共ㄉ留
守ㄉをとりられバ諸卒を下知して透間なく鉄砲を
こめ替〳〵又ハ強弓の手とれをそろえく散々ハ射
出し打立させるハ拜郷もこハを大事と從
者をいさめん去ども〳〵こらへよ程なく矢摧王藥も盡
ぬべし其間ハ塀を引倒せよいまゞ補理をてされ
バ鉤をかけ力を極めて引やくと下知しるハよ
り北國勢の其中より數十人むせ集り鶴のも

鋤鍬を以て柱を囲りあざ〳〵て難おく一重ハ引退
〳〵り砦の中ハ爰を破られ〳〵と火水ハありて
防きにるところへ山路将監家内者あれバ先陣ハ
加ハり〳〵高山右近が手をバ徳山五兵衛不破彦
三ハ打まかせ其身ハ此処へ引かへし拜郷ハカを
合せ塀際へうち寄せかゝりてすり思ひまうけ〳〵長
柄の鎗を以て塀越ハ突かけらる程ハ中川勢以の
外ハ周章し少〳〵白あて見えるを辻喜太夫こゝ
ろ〳〵かハ侍ハ死してのち名こそあ〳〵れ鎗
あるハあとそれ程どハ怖くハ軍の陣ハ出さるぞ
と証し〳〵多く鎗を奪ひとり先りの狂ひと働き

ける市浦六蔵これを見てみ事おハ喜太夫との我
等ハ左ようハ働きいたもめと云よりもせ〳〵鑓十文
字の鎗の一丈をかりてるを提げて見知りとるぞ
山路将監後めさくハ紫田方へ降参し妻をこゝろ
妻子ハ死恥見せ〳〵人であし汝を突ハこの鎗ハ勿
体ゝ〳〵と思へどハ戦場あれバ中ハくハ竹の鎗
の合期ハぞいで一鎗と突かいるその勢の烈しさ
ハ将監ハそれやあとりん又ハ恥かし〳〵とや思ひ
りん多くの人ハまされて影ハ見せず市浦怒りて
声ハうハ山路ハいづくぞ将監ハと呼ゝ〳〵
突立つれバまたくく間ハ七八人突き伏せさり此

勢はひわや怖さうらん山路ゑ勢ハ裏くづれちと引色ゐ見えゝるを拜郷五左衛門援け来さう城ハ只今落んずるぞ者ども〻こちへよ五左衛門こゝゐりと名乗りかけつゝ下知すれバ又ゝりかへして戦ゝひゝり佐久間玄蕃と中川瀬兵衛三度逢て三度とかれゝるゑ中川ハ若のこを氣づかひて引足ゐ見えゝるを玄蕃名乗さうと進めバ中川が一族中川七兵衛尉同新十郎同小右衛門尉同淵之助郎等ゐハ古田喜助同喜八我突伏せんと攆先をそろへて責つけゝるゐより佐久間も左右ゐく進み尺上段下段とべりみだれ入りかゝり追ひうけ

かひよた〻峯の梢を散る紅葉嵐ゐさそふゑ如くあり山路拜郷左右へをつと引とかれ中川勢を真中ゐ引さつゝみ息をもつがずゐ攻立れバ瀬兵衛清秀馬かけすへ八方ゐ目を配りて下知するゐ中川勢ハ今日をかぎりと働きゝる中れも小右衛門淵之助引かえ〻〻近きりのをバ切て落遠きハ突ふせ又ハ射かとゝつ必至々々と攻立られ越前勢まと浮足ゐ見えゐりかゝるところへ瀬兵衛尉同苗七兵衛新十郎古田喜助うを左右ゐ右さゞへ拜郷山路ゑうゝろうり雲龍の驚濤を鼓ゝ暴虎の颱風ゐ乗ずる勢をゑ〻真一文字ゐ切り

かゝる山路拜郷たゞ〳〵といへ共一支もさゝへ得
ず五六段たゞかりむつと引退くを中川瀬兵衛のぶ
さゞと追すゞふところへ佐久間玄蕃允よと入り
かゝりて攻来る中川勢ハ小勢なれども思ひ〻〻り
おりの共あり佐久間ゐ向て切れども射れども事
ともせず追ひつ返へつ寄すれバ討うてバ拂ふ
て押合ひ切合ひたゞかふほどゐ中川ぶ頼み切つ
たる市浦六藏乱軍のうちゐ討とれ清秀これ
をゞ目おもかけず佐久間を討とんと進みれバ
佐久間ハ中川を見知て只一打と鉄棒を取り直し
うちかゝるを瀬兵衛清秀弓手おうゞく馬手へ廻

り獅子奮迅の氣を増バ金鶯廻天の翼を飄す西國
ゐ聞へさる打物達者と北国ゐ類おれおる大力ゞ
軍する体ハ世ゐ目覚〻〻見えゐり辻喜太夫古
田庄右衛門ハ主の中川を討ゞ佐久間ゞ左右
より切かゝるをゞ〻〻かゝ〻間道を廻りて若の
後へ志のびたり〻神戸兵左衛門佐久間久右衛門
合弟源六の子の者七百餘人ひそまりかへつゝ居
さるゞ時分ハよ〻と兵左衛門七百餘人ゐ持
せさり〻投松明ゐ火を點〻若の内を志〻てゐザ
させ〻ゐどゐ忽ち小屋ゐうつりて燃上り黒烟天
を焦〻て駭〻くぞ見えさりけり若のうちある中

川勢少を防がんとすれば大手より攻入らんと敵
ハつのり敵ふせぎ向ひて軍せんとすれば猛火次
第小立のぼる搦手よりハ神戸兵左衛門佐久間久
右衛門同源六すさまじかりしかども中川小右衛門同淵之助をも
り中川が侍ども命を棄てぞ振舞ひるされども其
身鉄石ふたらざれば中川小右衛門同淵之助をも
じ死いづれも重手數ヶ所負おびただしきあり
防き戦ふとかくするほどに大岩山の砦なる敵
入かゝりしと見え関の声おびたゞしく聞えしゝ
ばさゝりふ武く勇める瀬兵衛尉も大ふおどろき
如斯なるべしとかゝるてより思ひよふけしとかが

ら今さらの心地しく行みるところを玄蕃名進
近づき何とあされしぞ中川殿と声をかゝれば拜
郷五左衛門山路将監同じく右左より寄と来り
今ハ砦も落てゆ何方へ引とあるべさ只尋常ふ討
死しゆくべ日頃傳へ承めるしよりハ無下ふ比興
ふ見えゆふりのかあおおくれのふる中川殿と声々
ふ呼ぶれハ中川瀬兵衛尉大音ひげ何とて一足も
引くべさぞ憑さりのい詞すやと云よりて十く
三尺二寸の相州貞宗の大業すのを打ふりく群が
り来る越前勢を薙立く四角八面ふ切て廻れば
真甲梨子ゝり胸板割り横胴腰車當るをさいたひ

見るかうちゐ十七八人切伏せらるゝれゐ續ひて
小右衛門淵之助をたゝめ譜代重恩の士ども名を
ゐ義を重んじ一足も引かゞと働らきゝるゐ
り山路庄郷ゐらひ兼左右へたつと物ゝかれ
引さ去りぞく是を去ゐさつと引ゆゲ手負
討死を算ふるゐ初ハ二千餘人ゐてゆりゝるゞ今
ハたづかゐ三百餘騎それさへも薄手の一ヶ所二
ヶ所負ぬものもあく鎧の袖草ずりハ切り落されゝ
兜も著たゝ大童ゐ髪ふり乱ゝ者のみあり又辻
喜太夫右田莊右衛門ハ敵ゐゆふて五十餘度あり
しが終ゐ乱軍のうちゐ討死し残る兵四五十騎瀬

兵衛尉の馬印を見て一所ゐ馳ゆつよる佐久間玄
蕃ハ中川を討らしつと思ひ血眼ゐありて走り
めぐりゝるゞ是も同じく中川ゞ旗を見て嬉しや
ゆれゐひかえしハ大将中川瀬兵衛あるハ右加も
小勢ゆり中ゐ取こえ打とれやと云ふり早く玄蕃
允真先ゐ進めバ佐久間久右衛門同源六をとらゞ
りのと連さとり清秀これを見て今ハ瀬兵衛ゞ死
すべきところゆりと馳出れバ中川小右衛門同九
郎次郎左右ゐとり分きいかゐも軍ハ是よしゐゆ
へども大将討れさうと敵ゐ知さぬを以て第一と
すとうゝあり及びゐ某兄弟こゐて防禦仕る

べし〳〵早く御自害いべしと勸められハ清秀莞爾と笑ひ其方どもの言葉も其理なるに似され共清秀若さとさうり今日に至るまで敵ふうしろを見せしことなし死ハ切死一人にても敵を討しぞ心地よさぞとて一鞭打てい馳さりぬ

中川瀬兵衛尉清秀戰死の事

并佐久間凱歌不吉の事

越前勢ハ中川瀬兵衛尉を討捕らんと東西南北より寄せ来りその間三四十杖ハ過ざりし清秀これを見て斯ぞうり近〳〵と敵に寄せられて是をうたずハ末代までの恥辱ありいて追散して見すべよぞ其方共も弓矢とる身なり子孫を思ハヾ我ハつゞけや討死〳〵と躍下ハ赴むき炎魔王に見参し今日の手柄を語るべしとの〳〵ありあぐり佐久間拜郷山路が勢の真中へ切て入り竪横十文字に乘りまハし〳〵手の下ハ六七騎を切て落し十五六騎ハ手を負せ左ハかへし右ハえくりたさらも摩利支天の荒さるが如く前ハたるかとすれバ後へハたりするごとき太刀の光りハ電光に似て手ハもとられぬかけろひの眼狂〳〵く見えハたり中川小右衛門同九郎次郎古田喜助いづれも主ハ劣らぬまけず走りまたり切り廻るほどハさしりハ猛き

北國勢もてなゝ浮足ゐあれバ佐久間玄蕃允鞍
の上ゐ立上りきたあゝ面々の振舞ゐ越前を出
しより命をバ匠作ゐ進らせしゐ非ずやなれこそ
中川瀬兵衛尉千騎萬騎ゐもます首ゐり誰ゐもな
れをや討取れと下知すれバ承まり奴といらへし
て進むを中川ちち迎へ拂ひ切りと云りのゐ切立
られ佐久間ゞ軍兵くずれ立右往左往ゐ散らんす
玄蕃允大音なげさはゞ後れしりのとハ思ハざり
しゐりろくも打負つゝ見苦しさいで一軍しく見
すべきぞいづれもこれを手本ゐせよやと云おゝ
ゐ八尺なりの鉄の棒をうちふりく中川が勢

の真中へ面もふらず狂ひ入り上下左右東西南北
へ敵を立れバ厚郷五左衛門力を得中川小右衛門
ゐとゝり合一交もたゝ戦ふゝり中川小右衛門ハ
西國ゐきこえさる武術の達人去かも荒馬乗の鞍
達者五左衛門ハ北国ゐて名を知られし勇士なり
身の丈いづれもたくましく髭黒々と左右ゐかゝ
みゞく追ひつまくりつゝ馳合せ切れバ突きつけバ
ひらいつ勝負ハ更ゐ見えとかず山路将監支来り
中川九郎次郎ゐうち向ひ柏の葉の印付けゐふハ
中川どの〻一族ゐて在すゐやうれハ山路将監ゐ
ゆと名のりかけられ九郎次郎も馬をかけ居片田

舎のすつむ武者を山路殿とせうんハよく知りあひてにり如何ゐも瀬兵衛尉が末々のりのゆく男ちいさく武勇ハ数あらずゥへ共主君ゐ仕へて二心ハりちいをぐいざ参らふとさけびつゝ山路が弓手の袖を切て落す山路いさゝか油断して不覚とりしと思按し少しひらいく切りもらいへバ中川ゐ心得さうと首をかさうふけ切て入る北越勢のうちより連島傳蔵下田忠二郎佐用田周平治竹島伊平治四人一所ゐ前後左右より寄せ来り瀬兵衛尉ゐかけ向ふ瀬兵衛尉ハこれらが体を見るよりゐからくとうち笑ひ殊勝ゐも見つるかゐ其方どもハ

命ニさッたりや此清秀ゐハ似合しかりぬ奴ぞうゐれど冥途の旅の道草ともらひ死出の山の案内さセだやと思へバ切て取らするぞと大音声ゐのゝ右りつゝ例の貞宗の血を拭ひアくとうちゆり打ふり待かけさり連島下田顔見合せ悪し中川瀬兵衛尉その口切りさ息の根止んと切かゝるも清秀かゝ手うちゐ横ゐ拂へバたハれむべし連島傳蔵下田忠次郎一度ゐ二ッゐ切られ右と左りへたゞれにり佐用田周平治ちゐかそろしや中川殿たぐし佐用田が骨ハかさくゝと一声高く呼バりつゝ太刀を抜かざして切入を清秀少しひらけバ

うつ太刀の目ねて違ひ腕さゆむところを見すゝ
〳〵丁と打バ周平次袈裟ゐ切さかれ馬をこ〳〵て骸
ハ左右へ落ゐり残るハ竹島伊平次只一人かあ
を〳〵とや思ひらん逸足出し〳〵逃るをきとあさ
汝がふるまひやと云まゝゐ及びごゝのから竹と
り是ゆ同じく息さえとり清秀四人を手の下ゐ切
ふセ快ぶゐ太刀の目釘をくひ去め〳〵猶ゆ切をら
ひく〳〵進み〳〵ハ越前勢かのゝ恐れて近づく
りのゆあゝ大将玄蕃允かくと見るより口ゐ〳〵や
清秀一人ゐよさりの多く討セとり我討とりて彼
奴等が供養ゐ供ふべ〳〵と云ひあゞら件の棒を取

あゆ〳〵馬を躍らせとびかゝれバ中川清秀も玄蕃
允をバ見知りさり若輩ものゝ推参至極と叱れバ
玄蕃允老武者の慮外千万ありこの棒うゝく見ゆ
へやと討かゝるを清秀すかさず馬をかけちかへ
さま玄蕃允が具足の射向を目ゐかけ切り拂らふ
今すこゝ清秀が太刀の鋒下ゞりさらバ玄蕃允膝
口を切られゐん危ふかりにる戦かひあり玄蕃允
も心中ゐ中川ハ老兵の名人あり油断〳〵いらゝ
かりぬべゝと思ひ定めかけつ引つ中川を労らさ
んと清秀進んで競ひかゝれバ盛政棒をありかさ
けて颯と引き清秀馬をかへゝて引きのゝと見れ

バ盛政棒をさり直しくくたくくりかくる一實一虚の進退奇変さがひゐ得さるところあれバ梢を傳ふ猿の如く林ゐ伐そぶ鳥ゐ似て見物の目を驚ろす玄蕃允ゞ郎等ゐ近藤無市といふものの主をさすけ来り中川どの御免伐れやと突かゝるを清秀見かへり優しき奴の進退やかなもゞれども清秀ゞ刀のさびゐあゝくれんと太刀とりあゐし切り拂ふすきまを見さゞゑん玄蕃允かの棒をふり上げ微塵ゐあれやと清秀の左の肩をたつゝとうつ打れて清秀鞍を越し馬より左ゐ下り立つを近藤無市もしりかゝり組とそのまゝ右の脇を二刀さしよ已

るところを押し伏せ首を取て立上る嗚呼いさまあさかゐ中川瀬兵衛ゐ〻〻ゐ筑木攝津守ゞ旗下ゐ伐りて和田伊賀守を討ち武勇の名を畿内ゐ轟ゐしゝるハ三十一歳の時ぞかゝるその〻ち武功度〻あゝして西国までゐ中川と云へバ誰知らぬものゐあるまゝくゝめゞさとゝゝしゝるゝ又去年山崎ゐて明智の先陣を切り崩ゝ去ゝバ筑前守ゐ厚く賞翫ゐさゝりゝゝ然るゐかくゐありをつゝる弓矢取る身ゐてハ常のとゐゞゝ哀れをかるゝゐらひゝゝ中川小右衛門ハ拜郷五左衛門と戰ゝひ居さりゝるゞ清秀うさめゝと見るゝ氣おとろえ力屈ゝ終ゐ五

左衛門ハ討れ中川九郎次郎ハ山路将監と戦うひ
けるが是も瀬兵衛の子とるゝを見て今ハ是まで
ありとかり伏立ながら腹かき切て倒るゝを山路
えうと進みより首を取て立上る中川淵之助ハ
かくとも知らず佐久間久右衛門その弟源六と迫
てハかへ〳〵返してハ又進みけるところハ敵の軍
兵声々ハ中川殿を討取とりと呼ぶるを聞さこれ
も同じく切死ハ死くりけり玄蕃允ハかりひのま〳〵
ハ中川が砦を攻ぬさ大わらこび勝鬨をたゞん
と真先ハ本丸へ乗入れ陣屋の屋根へかけたゞり
十餘人ばかり〳〵同音ハ鬼々あう〳〵と呼ばり

けるハ不思議や陣屋の棟木ぐハらく〳〵と崩れたり
まちハ三十餘間一時ハ倒れけれバ大膳不敵の佐
久間玄蕃心ハやかくりけん本丸の外へ出凱歌を
ひけて勝家の本陣へ此由を注進〳〵とりけり
淡海輿地志略ハ伊香郡餘湖の東岩崎山の南ハ
大岩山ひり其山上ハ中川瀬兵衛尉墓ひり高さ
一丈餘そのかさとうハ家臣の墓ひり天和二年
四月廿日百年忌の時木本長祈山浄信寺の住僧
雄山の碑銘あり

重修真書太閤記八編卷之廿九

高山開柵諸陣恐怖の事

并黒田官兵衛尉深慮の事

越前方おゝく武勇絶倫と世に許されし佐久間玄蕃允盛政山路将監が物がとりおよつて賤ヶ嶽の地理を明らめ神部兵左衛門等が計策を用ひて正偏奇偶の兵を進めさしも名高き老練の中川瀬兵衛尉清秀が籠りし大岩山の砦を襲ひしるゐ天時地利人和相應せしゐやゝ難みく砦を攻拔のそろうず鬼神をも欺く瀬兵衛尉を討取りその外中川一家

重修真書太閤記八編卷之廿八終

たる小右衛門淵之助七兵衛新十郎九郎次郎をも
じめ家臣古田春助同庄右衛門辻喜太夫市浦六蔵
以下十餘人の首を取すてさせ柴田の本陣へ注進し
さりゝ此道直ハ一里ばかりなれ共廻りなれバ
六里を隔てとり去かるハ羽柴方おくハ大岩山の
北岩崎山ハ備へとる高山右近大夫長房そしめハ
中川瀬兵衛尉を頼みてや来山羽田ゞ使ハ向ひ勇
氣十分の返答をあゝ北国勢寄来らバこれをうち
ゆぶりて武功を立んと擬しるゞ徳山五兵衛尉
安井左近允ゞ大軍を以て押しよせ一時攻ハせめ
ゆぶらんと大旗小旗数十流をさしかざし貝螺鐘

を鳴らし鉄砲をうち加へとるうちハ中川
ゞ砦ハ焼き立られて黒ふり天をこがし矢叫び
鉄砲の音おびたゞしく聞へ瀬兵衛尉主従多く討
死せしと見え諸雑兵らゞハげもしり佐久間ゞ陣
ハ勝どきの声勇ましくどよめきそられバ右近大
夫とちまち臆病神ハやさそれらん敵いまゞ近
づきもせざる間ハ岩崎山の砦をひらき木本さし
て引き去りでき田神山ハ陣ごりし羽柴小市郎秀
長のもとへ使を立てい越前勢目ハ付まる大軍お
れバ岩崎の砦持こらへかさく空しく討死つかよ
つりゆとも敵の氣を増のそかて味方ハ一芥の益

あくゆうひどくりでを開きこゝまで引とりゆゝ
何方ゆてもけれ御差番ゆより防戦仕るべくゆと
云せにれバ秀長わくさ高山がゆ係かゆ来山羽田
ゆことへ〜舌もいまゞかゝたかぬゆ筑前守の差番
をそむき〜臆病者岩崎へ引かへ〜兎もかくもあ
られゆへと云ハむやと思をれ〜ゞ急度案じ直〜
かゆうの恥おらゞ〜手ならき差番せバ必定北
國へ降参すべきゆり筑前守の耳ゆも入ず味方一
人失あをんと善計れゆもならずとて先高山ゞ使者
を呼びへれさぞか〜越前勢ハ多かるべ〜高山殿
の分別まとゆりつとゆも至極ゆゆ早々此方へ徒入

ゆべ〜迎のとめ弓鉄の足軽ゆ分てゆといをれけ
るゆより高山右近大夫主従大ゆよろこび田神山
へ走り入り再生の思ひをあ〜てにり然るゆ堂木
山の蜂須賀彦右衛門尉木村小隼人菖蒲谷の堀久
太郎秀政小川土佐守戝ゲ獄の来山修理亮羽田長
門守その外大塩金右衛門尉山内猪右衛門尉生駒
甚助木下将監同左衛門大夫堀尾茂助明石与四郎
柴田伊賀守の家老与力の面々いづれも大岩山の
火の手ゆ驚ささ〜も猛勇の名高き中川さへ責ぬ
かれ〜とおぼえとり然る勇士をれバ必定討死有
〜らん北国のゆの大勢去かゆ勝軍ハ仕とり玄

蕃兒が勇氣ハ日ごろに百倍なつらんあなどひ
切りかゝり敗軍をさらバ賊ゲ嶽すべて佐久間ハ
取らるべしいかゞハせんと氣も魂も身にそなゞ
仰天してぞ立さゝかゝるところへ寄さらバ何
さま賊が嶽すべかりしるに玄蕃兒勝
軍に心おごり氣ゆるみそのあゝ寄るともせざり
しるほどに砦々より大垣へ注進櫛の齒を引くよ
りもあはたゞしく晝夜をいとゞ馳せさりし矣に
神子田半左衛門尉ハ思慮ふかき者なりしれバ諸
陣中を乘廻し筑前守大軍にて大垣をうち立れさ
れバ今二時ゞ三時のほどに來著なるべきぞ剛

膽ハ大將の眼前にて爭そひゆくやと大音声にの
のしり廻りしるにそいづれも軍の魚の水を得し
心地していさゝか氣力を増さりしこれハ全く
半左衛門尉が計策にて實に筑前守の發足せられ
しとバ知らざりしるに不思議に大垣より加勢の
雲霞の如く馳來りしぞ天にロあり人を以ていた
ゞむとハかゝる例を云あらん抑中川の砦すぐに
落て猛火天を焦しるを見て黒田官兵衛尉孝高
持口の櫓に上り大岩山ハたゞや落つると覺へさり
誰らかる軍のやうす見て參れやと云へバ黒田が
家臣竹森松若すゝみ出其罷り向ひ見て參らんと

馬ふうち乗りをせ出すこれハ播州大野の竹森石見守が長男なれども幼稚ゆへして父ゆ離れ官兵衛尉の手元ゆ育ち十六歳ゆて初陣し度々の手がらをあらはし九通の感状を受とり今歳ハ三十二歳あり孝高松若が返ふを今やくと待れしかども時を移して音もせぬ是ハ一定敵ゆ取こ免られて討れつちん然ハ北国勢よくく強しとかぼえとり心の上ハ官兵衛も戦死すべし但しこの軍ゆ父子共身をほろぼし黒田の系畠を滅却せんもロおしかるべしと思ひつき小寺左衛門尉栗山四郎兵衛両人を呼び近づけ其方共も見ゆるりつちん中川の

砦ハすでゆ落さるべし瀬兵衛尉ハさる武勇の男あり決して戦死しさるあらんなれ用どの待さへこらへかゆて砦を攻ぬうれその身戦死せしこと全く玄蕃允が武勇瀬兵衛尉ゆ勝りしゆへゆ非ず又柴田が運強く筑前守の運弱きさえゆもたらず只時ゆ取て勝敗の地を替しのをありさりあがら北國の兵士勝軍しくそのの氣力盛ゆ味方負軍して勢力共ゆ衰へされバ只今掛合たらんゆハ必定勝を得がたし去とて爰を引のかんをハ勇士の恥ゆこころあり某ハ此処ゆて討死すべし但吉兵衛運死を同じくせんをハ智計の足ざるところゆて死

ーたる後ハ筑前守ハ笑をれんを如何ハもくーかるべけれバ其方二人兎も角もーて吉兵衛を退せよかーと云られバ二人共口をそろへこハ情なき御設ハていハ如斯大軍を引き請け殿の左ようハ思ひ切りあふ場所をのがれよとハ我等二人とも よく腰の抜ーと思ーめさるいハや其儀ハくゝハバ我々共御前ハて指ちかへ先出三途の御先つかまつるべくゝと一度ハ怒り一度ハ哀みつい更ハ逃ぐべくゝも見えざりにるハより官兵衛尉二人を急度見て其方どもハ役ハ立べきのとおりひて此まで扶持ー置つるハ左ようある虚氣者と知ら

ざりにハこそ孝高ハ不覚あれ今一度思案ーて見よや筑前守ほどの弓取今より後ハ二人と有べきや此度の合戦も始終ハ筑前守の勝るべられ共大垣と此処と道阻らく境遠ー今日明日の間ハ加勢の著陣おぼつかあーー依て孝高ハ此処ハて討死とでやと思ふ吉兵衛ハ栄ゆく末を草の蔭ハく見んと鏡ハかけて明らかあり但ー孝高ハのものハ容易く討死すべけんや討死の様を思へや若りの共と云られて二人とも手を拍て誤り入てゝゆ御心よく御討死なそバさるべくゝ若殿の御事ハ御心易く思召されゝゆべーと云ひつゝ甲斐々

々〳〵十三歳ゟ有りめゟ吉兵衛長政を守護して
陣中を立出敵あさ方を志して立ち忍べバ官兵衛
尉孝高ハ母里太兵衛後藤又兵衛黒田小左衛門尉
等ゟ後陣を守らせ其身ハ北國勢のかゝるを待て
一戰せんと真先ゟ進みて敵をまつ心のうちこそ
すさまゝにれ
向四郎左衛門尉覚書ゟ柴田合戰羽柴殿ハ近江
の北の部ゟ柴田と對陣ゟて長陣ゟへ諸人數く
さびれ居ヤゆ処ゟ筑前どのハ美濃の国の三七
殿心かゝりゟゆて美濃へ御越しあされゆ内ゟ
柴田内佐久間玄蕃がさきを仕り筑前どのゝ諸

勢の陣山ゟりて後を朝早々より人數く
ゟ〳〵跡へ廻り中川瀬兵衛ゟき上の陣どりまく
數度鑓合ゟりけゝ瀬兵衛ハ討死仕り中一日瀬
兵衛陣山ゟ玄蕃居ヤところゟ筑前殿へ早うち
參り御ゟゝつけゟて三日めの朝早々同のくゟ
玄蕃が陣へ御旗本許ゟて御ゟいりゆ処ゟ玄蕃
も人數引きとりゆを御つけゆて鑓てじりゆ
七本鑓とゆハそのときのまくゆ追崩し合戰
ゟ御勝被成ゆさゆて人數ゟ息を継ゲセ柴田が
本陣へ御ゟゝりゆて追崩し追うちゟ成されゆ
後藤又兵衛殿も追つけ首取被ゆ事

黒田吉兵衛尉長政武勇の事

并島左近智謀の事

小寺作右衛門尉栗山四郎兵衛両人ハ黒田吉兵衛尉長政を伴ひ敵ゐき山路をたどる〳〵三十余町打て行に1関の声矢叫び鉄砲の音ゆ〳〵遠ゆく有に1ふゆり吉兵衛尉長政不審しに1ハ作右衛門四郎兵衛何と云ひつるぞ北國勢強く〳〵て中川殿戦死しゆひ大岩山の砦落去しつれバ佐久間玄蕃允勝軍1氣ゆゐみ今日ど中川どのゝとりて1陣取さるをこつる1ゆり後へまゆり山の上より真一文字1打かゝ〳〵佐久間をゝじめ北國勢を

みあごろ〳〵ゆせんと云ひ〳〵ゆにらすや然れバこそ父君と引き分られ其方どゆと共ゆ奚まで寄せさるゐれ去かるゆ鉄砲の音ゆ次第ゆ遠く矢叫ひも聞へず人馬の音ゆ絶々ゆり何方より大岩山の峰へハのぼるそたしかゆゆりせと有つるゆより二人とゆ實ハ佐久間が陣へ向をんとゆハいをゝ大殿の仰ゆ北国勢ゆ強く働けハ容易く防戦ゆ〳〵がさ〳〵舵せずハ此陣ゆ打ち破られぬべくかゆるゆり然りさく此陣退ひくハ末代までの瑕瑾ゆり但し軍ハ始終筑前守殿の勝ゆるべけれバ若殿ハ筑前守殿の御方へ御入いて繁昌あさせゆ

ふべしとて我々二人御供ハていとと答へいらを
聞くやいなやア作右衛門四郎兵衛よく承われ
その方共ハ大殿だかりを主とゝのみ吉兵衛をバ
主人と思ひぬゝ大殿いゝ1仰せらるゝ共事の始
末を某ハかゝきゝ1せ某ハ得心せ1上ハてこそ計ら
ふべきれ然るを已ゝ心のまゝ我をハざむくと
の面ハくや幼稚と云ふハ五ツゝ六ツの歳ごろよ
りや十三歳ハもるゝぞゝ1父と共ハ出陣1父が
難儀の軍するをよそ1ゝく身を遁るゝ四どの長
政とかりふてゝそこ退けゝりと声ふるハ1馬の
ゝをを引ゝへ1元来1道を真一文字1一鞭ハて

てゝらすゝる作右衛門四郎兵衛二人顔みハてせ
麒麟の兒ハ當年ゝりと世の諺1いふハ違ゝぐか
そゝ1き若殿やハの勢ハてハいゝ1止むるとも
我等が詞ハ従ハゝるべきや然バ跡ハ續きて先途
を見つぎゝべ1といふゝ早く何れゝく馬を引
ゝへ1長政ハかゝれゝとゝせゝゝり長政去き
りハ馬をゝせゝひゝるとゝろハ毛色ハき鎧著
さる侍三騎横ゝぢかひハ長政の馬の前をゝせや
くゝをみて長政馬をゝけハせ何ゝのぞ北国勢とみ
るハひゝ目ゝと声かけ1四どハかの武者ゝりか
へり是ハ安井徳山の手のゝのゝり高山左近の退

口を心ゞけうちよせつるふをや落うせそれバ残念さゝ猶落武者の内るゐらんと味方ゐ先ざちすむゐり問ハさそ若き人のゆさ〳〵くゆみえのふものゐる末代の名人とおひさきさのり〳〵く存ゆうちつれすべくといひゆれバ長政きてハ紛れもゐき越前侍ござんをり遁すちじといふふらとゑれバ太刀ぬきてゐ〳〵跡ゐさがりさる武者を袈裟ゐ切て落す先ゐす〳〵み〳〵二騎の武者とつくかへ〳〵黒田と名乗バさゝうゐ官兵衛尉の忰ゐらん小人ゐれどゆ名ゐる者をり片手うちゐ討とつて越前へ上産にせバやと

云ひゐがら鎗をゐげすく太刀を以て右左りうり切てかゝるを請ゐゞ〳〵てらひつ切つ上段下どん一交りせど戦ふゐ小腕ゐがらゆ吉兵衛尉長政ふみこみく きりまくりきりまくるほどゐ二人の武者ゐくたゝ〳〵兎角うけ太刀ふのゝまりけるを作右衛門四郎兵衛てるゥふみつけ南無三宝若殿の太刀うちゆゆちありてハかゐて〳〵と鞭ゐふゆぶみを合せて走り来り鎗を去ごひて両方よりつきう〳〵れバ長政いよ〳〵かゝをえて前ゐとちさやらひの引手のかひゐをきりかと〳〵ゐほゆいうつてうつ太刀をゆ〳〵らひかゐ引たづして脱れ

せけバ小寺栗山のがさじと進みしゝども彼ものゝ
共運やつよかりゝん遂ゝ延しえてうちもらしつゝ
四郎兵衛馬より飛で下り長政の切落しとる越前
武者の首をとり扇開ひてゝふさとて十三歳の小
腕と云ひ膽太くも三人の武者を相手としてたゝ
うひその上ゝ一人を切てかとし一人ゝ手をおハ
せのひし鬼神の如き若殿よゝつぷれといふも餘
りゝや千万年の後までもかゝる大将ハゝるま
じいぞと一時立てぞ舞とりそれとりのちハ
手おさつりのも無りしゝバ難るく賤が嶽の砦へ
去づゝと引て入り官兵衛尉おかゝくと語りしゝバ

孝高さひゝく侍の子ゝ二人をうちもらしつるを
の云ひ甲斐おさよと叱られしとゝり此ときゝ木本
の尾崎ゝ陣どりし筒井陽舜坊法印順慶の勢ども
中川の砦より黒煙さち炎ゝんくと燃へゝがるを
見てすハや越前勢勝とりくと呼ハりつゝ諸手一
同ゝ騒ぎ立ちゝるところゝ高山右近太夫持場を
ひらいく羽柴秀長の陣所へせ入りしと聞くい
よゝく仰天し越前の勢定めて爰許へ寄するゝうん
如何せすしと混乱しゝるを見て島左近松倉右近
飯田三郎次郎陣中をかけ廻り明日ハ筑前守どの
大垣より當表へ著陣のよし早駒来りてとしゝゝ

注進ありしの間ぞりちばくをよく踏こらへよ思ひさがひしく後難をかふむるお下知をそむゝバ只今切て棄んと嚴重ゝ沙汰しれいさゝ静まるやうゝ見えしかども大勢のかどろさ立しをるれバ兵氣匆々としてすのゝ用ゝ立つべしとハ見えず島左近諸手を去づめて後順慶法印の前へ来り中川どのゝ砦せめかさされ高山殿砦をひうかれいゝより味方の兵氣大ゝ浮き立て見えてゆ一旦の計策を以て取去づめゆへども今四時五時も過ぎゆをんゝ追々ゝ落失せゆべし但し越前勢の氣色ゝいぶかしきところのゆゝ

左近走り向て見て参りゆべし左近ゞ帰りゆまでいかやうのとゆ共此処をすこしも御退きゆまじくとヤ切て乗出す順慶法印左近を呼びとめ越前勢ハ大軍なりそのうへ勝軍して鋒當るべからずその方一人まかり向て引きかへさんと心りとゝし人數を召しつれ然るべしと云をれしゝバ左近馬の頭を立ゝ引手づゝかひくりたゞかり多きヤ條ゝゆへども左近十四歳の初陣よりして大小の軍ゝ合ひゝて七十餘度いまゞ一度も不覚をとらゞ候の作法もかさの如くあしゝおぼえてゆ御配慮なるまじく只このところをよく御ふみこさ

へいべくいとヤすくい馳いづ〳〵數万人うづまん
て屯せ〳〵北國勢の陣々を去づゝ是より〳〵安井
徳山の陣前ゝ至り馬ゝ輪をかけそのくち手づゝ
を引〳〵め鞭をいて人數を大形ゝかそへ扇ひらい
てうちつかひ是ハ大和侍ゝ島左近とヤすのゝいゝ
中川殿の陣をうち落〳〵めひ〳〵御をさらき近ごろ
目をちどろかされてゝ高山殿ハ御勢ゝおぢめひ
〳〵ゝや持場を明られゝいへども大和武士ハ左さう
ゝもいハず今晩ハすでゝ日夕陽ゝかゝむきてゝ
明日早旦ゝ御向ひゝ弦たゞ〳〵ハ是より參向〳〵く
見參ゝ入るべさや御返事うにぬハりヤさやと

云へとも北國勢何とう思ひゝんこれゝ答ふる者
あ〳〵左近あゝ〳〵ひ北国勢ゝ馬を引むけて身不肖
ゝいへとも御陣前ゝまかり向ひ軍の次第ヤ入て
いゝ御返事ゝ〳〵さてハ軍の作法御不案内ゝいや
らん御いとまヤそ方々と高声ゝよばりゝ〳〵ぐう
馬をとバ〳〵くれせかへる島ゞふるまひを感せぬ
りのこそゝかりゝれ
一本ゝ島左近松倉右近二人うちつれ徳山ゞ陣
前の山の尾崎へ馬をかけすゑ日すぐゝ西山ゝ
かゝむきりのくちの中ゝ分明ゝ見ゝず面々の手柄
のゝ程ど誰〳〵ハ証人ゝ立いべき明日寅卯の刻よ

を加あらず参向して大和侍の骨々とも涯分の力をたらし〳〵各の御ふむけをさち〳〵やべしと呼むりすく松倉右近ハ弓ゟ矢をうちつゞひ片手づあゝく馳ゝへる島ハ上矢をぬき出し一矢射てのち引き返すとゝろり

重修真書太閤記八編卷廿九

重修真書太閤記八編卷之三十

島左近一騎大垣へ注進の事
并佐久間玄蕃驕慢三士不快の事
羽柴筑前守秀吉の幕下ゟ属し殘ゲ獄の砦々を戍り諸勢いづれも勇氣凛々として義膽忠肝緩急とハあられども越前勢潮の湧如く寄せ来り蜂の群がるが如く蟻のたつまるゟ似て幾千萬といふ員もしかられず日々夜々ゟ狼藉し濫妨極まりあられバさすがの猛將烈士も自然と恐懼の思ひを起しいかゟあり行く身の果ぞと心細くい思へ

とも尋常あらぬ筑前守なり又危人の心ハ及ばぬ
計もなるべしと推し量りかつハ神子田半左衛
門ゞ一時のそなりどきたのみ雑兵等の騒動ハや
うやく静まりつれどもいまゞ筑前守の出馬の表
しもあられバ如何ゝ有らんと片時も油断あ
く濃州路の山の端をのみ目守られ居りこゝ筒
井順慶法印ハ平常ゝ似ず勇氣さくさくしく床机ゝ
かゝり松倉石近勝重飯田三郎次郎頼直以下列を
守りて左右ゝあらび島左近ゞ帰るを待ち居さり
るところ〳〵程もなうせず左近をせ帰りしゝバ
法印大ひゝよろこび如何ゝやいうゝと次第を問

ひられハ左近持て去づめく法印の前ゝ畏まりて
るハ越前勢眼ゝなるる大軍ゝゆへども軍令と
とのをず士卒も大将も心々ゝ見うけさいその故
ハ大将佐久間玄蕃允血氣さかんの荒武者なれバ
直ゝ押し詰め一戦すべくおりひ立つを拝郷安井
その外の物頭どもいづれも同心せずその手の雑
兵等ハ乱妨分どりを利として更ゝ進み戦うん心
なく見えさうその上ゝ當方の懸り口ハ足場ならし
く田神山へハどちうくゝゝ分美濃殿の援兵ゝ便
りよろしく見えゝを以て紫田勢押ささりゝとも
山の上より落す敵ゝむかひ勝を得さる例ゝあく

いかひざ佐久間もみぞうゐかゝりうて戰せん
おくおかえゝ定めて玄蕃もこれまさの計策をバ
しるさらんあれバ夫しゝくかゝりゝゆすゞ左すれバ
玄蕃賤が嶽へかゝり一戰を挑まんとするまらめ
いそぎ美濃國へ馳むかひ軍のようすを筑前どの
へ注進仕るべくゝゆこれ當表第一の御忠節たるべ
くゝゆとゝまろバ順慶をしゝめ家老さちいづれも寃
竟の計畧ゆゝいそぎ注進ゝゆべくゝゆ但し誰かれと
ゝゆ反バず嶋左近の正しゝく見られし容子を以て
たりのまゝゆゝゆされゝゆ方一段まろるべくとゝゆ
より左近うにゆゝりゝゆゝとゝゆ終ず馬ゆうち乘う

鞭をうげ大垣さゝして馳出す
島左近ゞ早うちの路次ハ木の下より小谷へ二
里半それより春照野へ四りそれより一里半ゆ
しゝく関ゞ原又一里半ゆして樽井又二里半ゆ
て大垣るれバ都合十三里半ゆり
是時越前の先鋒佐久間玄蕃允盛政鬼神とよばれ
し中川瀬兵衛ゞ砦を攻めかゝるのみならず
瀬兵衛尉をゝゞめ能き武士ゆすと討とゝしこと
全さく天時の去からしむる処ゆして更ゆ盛政ゞ
たにく清秀の拙ゆいからゞ去ちるゆ高山右近開
城して四こさを避しより伊賀守の与力大鐘藤

八郎あと越前勢のたけ〳〵きを破竹の如く只一時
に攻ほふるべき体に見えつるに驚き降をや乞
む城を棄ていづこへ隠れやせん又ハ返へり
忠〳〵一旦の難をや逃れんと二心を懐くものも
追々に出来るよ〳〵を聞いざ〳〵玄蕃いよ〳〵こゝろ
おごり直に賊ども押かけ〳〵押かけ〳〵うんとはやりつく
かゝく勝家ぶ教訓せし勝て兜の緒をしめるといふ
ふいま〳〵めをもや打こすれ筑前守の砦々をこぐ
一挙に打ち落し〳〵この度びの軍功全さく佐久間一
人の手がらにあさむやと若氣の一途に思ひつめ
諸手へ下知〳〵るに越前勢の中にも安井左近

徳山五兵衛原彦次郎等ハ数度の軍に出ひりの
あれとる勇士なるを以て勝家も佐久間が血氣に
まかせて深入をさせん時一方便して引取るべき
とめにて付〳〵あれば〳〵より盛改ハ勇氣に
任せて働らくをさ〳〵てよ〳〵とも思ハず居さりゆ
るところへ賊ぶ嶽へとりかゝるべき由をきひく
大ひにかどろきかくてハ味方敗軍のりとひなる
べし〳〵然るをそのまゝに見すゞしてハ匠作にとの
あれし義も立ず始終味方のよむみとなるべし
で一異見せやと思ひさゞめ何れも同時に佐久
間ぶ陣処へ来り詞をそろへ今日の一戦ならば

勝利をえ〜と全くくりつて時節到来といふへ〜
この勢を以て羽柴方を只一呑ゐと思もれゆとい
えゝかりあるべく御思慮若くゆべ〜篤と御勘弁ゐ
りて然るべくゆ匠作も此義を呉々仰せられてゆ
敵も敵ゐよるものあり筑前守ハ奇正の軍配ゐ熟
しつるのえあらゞ変ゐ乗じ自在を得ゆとたとへ
バ猿猴の梢を傳ふよりも速ろゐ夕立の雲の忽ち
雨をいとすゝ如くゆ味方の軍兵も多くゆへども
大岩山ゐうち勝ゆひ〜より物頭衆ハ羽柴方の諸
士恐るゝわたらずと敵を侮どり雑兵ハ財宝ゐ心
をまどをされ分捕をのみ吉といふ〜てゆ只今賤

がとけへ御向ひゆむど却て大岩山と同じつらゐ
思ひ手がろく戦うひをすいゆ必定大敗のりこい
そんゝゆそのとき筑前守大垣よりかえ〜来りゆ
ひゐバ軍まとゐ難義たるべくゆ深く御思慮をめ
ぐらされ然るべくゆと老練の古兵ども一同ゐや
るを玄蕃きゝも分へず面々の異見道理至極ゐ
ゆべりれども此さびの軍ハそれが〜ゐ御まろせ
ゆるべくゆ其故いろゐとゐ大岩山の軍味うと
勝利を得ゆひ〜より上方勢大ひゐ恐怖〜高山ハ
開城〜秀長ハ身をちぐめて音もせゞその外味方
ゐ縁ゆるものどもハ寄々内通を企つるもゆり又

は全く降参をもかるるものもいきかれば此この畠を
ぬかさず賤ヶさけを攻拔きかゝこゝおさてさすりゝ
筑前は大垣よりかへるを迎へてうちすぐりゝへ
し筑前いかゝ猛くとも翼なるゝもならず十餘里
の道をいそさいそきむせ来さうんゝは士卒とも
ゝつかれて多くすのゝ用ゝ立べからずそのとき
うしろより匠作の勢をゝつてせめかけ前ゝは賤
ヶ嶽の切処ゝ強兵多く力を一ツゝるゝてふせぎ
たゝかひるゝ必定猿冠者を生擒ゝせでは置まじ
きありこの一戦こそ匠作開運のいくさゝゝも
のあれそれを左ゝりゝ臆病らゝくうしろをのみ

かへり見ゝすべきや面々も數度の手がらをたら
をゝめゝばかゝりゝるゝ軍法は心中ゝかばえゝふ
べきゝ只大事をのゝ取ゝふとこそ心得よいくさ
の撰發は目叩くまも油ゝだんあゝがゝゝいそげや
人々すゝめや兵どもとゝきりゝ軍列を定め人數
を操出しさらゝ三人の諫ゝ去さかゝ三人も煎
てより玄蕃允氣性をば知さりかゝるところを
推返し何ほど云とも承引なるまじきゝ去らら
ばおのゝうけ取ー軍をゝゝ外さづは匠作への詞
さけなるべしとおもひきりあゝさま玄蕃殿の御
軍略もその理はさこえくは我等も一應はゝーて

ゆへども然らんかハ何とて後れゝすべきやと會釋しくれバ盛政もよろこび安井徳山拜郷ハたゞひゝ色代して引分れ出陣の用意をあしらけりこのとき賤ゞ嶽ハてハ柴山修理亮羽田長門守ゆくらハ上り中川ゞ大岩山のとりでを望み見るハその道すゞハハ柴田三左エ門勝政五千餘人ハて備さりまいれハ賤ゞ嶽より切て出るこのたらバさへさりて食留めんとのこゝろありその左りハハ金森五郎八入道二千餘騎許ハゝ列を志くこれハ三左衛門と賤ゞ嶽より兵と軍おかバあらんとゆ横合より切かゝり

すれちかふゝ賤ゞ嶽を乗とるべき陣立と知れさり柴山羽田もこの体を見て容易ハうち出んとも思慮ゐるゆハ似さり如何すべきやと恐怖しにるうちハ大岩山落城とかゞしゝく黒ゝふり天をこがして駭しゝく立のぼりしかバ然らバ越前勢賤ゞ嶽へも寄するあるべし如何ある方便を以て堅固ハあるべき但しハこのところへ越前勢のむかをゆさきハ砦をひらき木本へんハ落行くべきやあゞ心こゝろハ見えしところへ黒田官兵衛手勢を引卒しかりめ手へ馳くハたりしハよりいさゝ氣をとりあゆしる其ところへ黒田吉兵

衛長政栗山四郎兵衛小寺作右衛門以下百餘騎を
ゐさかく汗馬を馳て真先ゐ越前勢の首を太刀
ゐつらぬき走り来れバ来山羽田いよ〳〵力を得加
くてゝ越前勢よせ来るとゐあんの怖るゝとゝ
らんと勇みすゝんで見えゐ〻り黒田官兵衛ハ詰
兵衛を見かへり如何あれバ此ところへ来りつる
ぞと不審るを小寺栗山口をそろへ長政乃詰つ
るとを真似びれバ孝高あをざをあかゝこれハ
長政がこゝろゐならぬ先祖定綱の御こゝろある
べゝとぞよろこびける越前勢ハ佐久間ぞ猛烈ゐ
る下知をまゝり旗の手をかろゝ楯竹束をかつき

つれ賊が嶽をせめ取て根城ゐせんとぞひゝめ
きける
甫庵本太閤記ゐ玄蕃允是ゐ大岩山をいふ在陣りとす
べき旨注進ありれバ急ぎひき入れいべゝ此
うへ大利ゐはこゝうされ只片時も早くひき取り
我が陣旅をかとくゝ時と位を見るゐりバ旬の
うちゐ天下掌握ゐ飯すべゝと再三馬上の歴々
を遣をゝいさえゝかどもり勝家よりゐ玄蕃勝ゐ乗て
聞も入れず勝家老屈ゝくもやく〻別も相違せ
うとて下知をも用ひず使者五六度ゐ及ぶとき
ハ去かゝ〻返詞をもせざりゝゐり兎や角せゝ

まゐ日くれぬと見えとり

黒田主従賤嶽援兵の事

并後藤又兵衛佐久間を謀る事

賤岳の大将柴山修理亮羽田長門守越前勢の梟雄猛烈あるを見て如何ゐーてゝ是を防くべきと思案とりくゝありしるところへ黒田官兵衛孝高父子援兵とーて馳くいちゝり去ゝバ砦ゐ空るところの諸物頭諸侍いづれも轍魚の水を得ーこゝ地ーて去ぢらく安堵の思ひをゐー去かども山上より見ることせバ越前の諸軍勢いろくさまくの旗をあびかゝ貝をふきて前後の次第を正ー鐘を鳴らして軍令を傳へ思ひくゝ指すのさいゼ鮫波の声を仍げつゝよせ来るさま山岳もこれぢとめゐ崩れおち流水も自然と堰留られんとす柴山羽田これを見て大ゐ驚怖ー越前勢ゝくまで多くハ有まじとかりひゝゐ山も峰も只一面の軍勢ゐ氣を屈ー勢さもみ始終叶ふべゝとも はかられず あまじひある軍ーて味方の力を落さんより一先ひきのきゝさ後ゝ軍をといのへ佐久間を追かとさバやあんど意見する人ゐひゝされ既ゐ柴山羽田當砦を落りやせんと思ひにるところへ黒田官兵衛馳くいたり何條こゝを落るといふ法やある

と諫められすこし心を取直し一ぱる体なりけれバ孝高両人ハ向ひあの〳〵何とて左ようハ狼狽たるぞや佐久間玄蕃允あのれ〻ハ勇ハ見こり大軍をさのみ嶮岨をいとゝず隊伍を乱して押さるハ必定敗軍の前表なりかの〳〵驚きあふべきことかハ一ゝのくるべく某〻勢劣弱なれとハゆへ共爰を墓所とかりそめ定めてハへバ一足も引ゞとゝくごゝく馳入りとさるものどもなり一方をバうけ取ゝすべくハ其内ハハ筑前守殿大垣より引返へゝあふべゝと語すゞあく理り密ゝハ説しめされ栗山羽田實ハ〻りつどもと思ひかへゝ見て黒田官兵衛さらバ手配をあゝめへといふ処へ吉兵衛長政越前の軍兵の首を太刀の鋒ハつらぬき小寺栗山を従ゞへ百餘騎あく馳せ来りゝかバ孝高その勇ゆゝて孝心厚きをよろこび偏へハ先祖の接け来れるありと賞翫しけるより栗山羽田ますゝ力を得されども越前勢ハ手痛くせめかゝるハより城中ハも反り忠のものやならんと疑心を起ゝそゝぐゝ右く持場くの備立をもあさゞりとるを見て黒田ゞ家のとゝりのハ後藤又兵衛基次さて人ハ許されゝ覚へのあるりとるゞ進み出て両大将ハむゝひ大事の御

評定ホ若年不才の某さへ出がまへ恐ありや條
ホハへども某まかり向ふて越前勢を臙脂さん
と存ずる一計のハまげて御ゆるしを蒙らんと願
ひしかば柴山羽田如何ある方便を以て越前勢を
臙脂されハやと尋ねられバ又兵衛申すこれハ時
ホのぞんぐ詞をあらけゆとゆへなうかどめ云々
ともやかさくハたくしに佐久間ハ猛勇のものホハ
へども死生の道いづれを好とぞんじハやとやさ
んホ死をおろこぶりの心ハ勝敗いづれを
取とおふさば勝を取らんとこそやすべきそ
の生をとり勝をもとむる術ハかうくとやハハ

必定それがくしやすむ術ホ者さかふへきやハ
よくや基次ぐやす前ホ分ハそもこの間谷の
うちホ一日半日をバ過しやべそのひさゆち
筑前守どの御参向ハべさあくハとやにるホよ
去ゝらバ其方敵陣へまかり向ひいづれホ時刻
そのバくハへと許されしかバ後藤又兵衛基次佐
久間ゞ陣へ向ひられハ柴山修理亮羽田長門守ゞ
使者ホさハやハ入べき一言のハとやにれバ佐久間
玄蕃允これを聞き何事ホもなれ使者とにるうら
ホハその口状をきかどとハふ法なるまじきあり
その者これへとやすべくハ然しるぐりまづ名字を

こゝく来れやと云へば佐久間ゞ郎黨後藤ゝ向ひ
来山羽田の御使者御名字ハ何とゝゝいぞと宣へば
これゝ後藤又兵衛基次とゝりのゝゝと答ふ盛政
然りのゝりとさゝ及よびとりいぐこれへと請ど
るゝより後藤すこしも臆する色おく佐久間ゞ
前ゝかゝこまり玄蕃ゝ向かひ兼てうけめとり及
びゝ御邊の武勇ゝより中川瀬兵衛尉清秀ゞとり
でたちまちゝ落去仕りたまつさへ清秀戦死しそ
の勢ゝおそれ高山右近大夫ハ持場をすてゝ退散
しゝ今ゝはじめざるとゝゝゝへども近頃世ゝすゝ
くれとる御手柄とゝべくゝ夫ゝ分来山羽田も大

ゝ恐怖しゝところ果して當表へ御出馬ゝ分てハ
両人も合戦をいどみ死力を盡しゝとべさゝくゝゝへ
ども熟かんぐゝゝへバ両人とも羽柴筑前守の為
ゝ死すべきほどの恩義おくゝゝゝより當砦をひき
ちりぞきゝとべしと思ひとちてゝ左すれバ御邊ゝ
も一矢一玉の労おくくくく勝軍をあしゝめんこと
様ゝらしくゝゝゝゝくぞんじゝ左ハ存じゝへども
御邊の御心ゝ何れゝゝゝゝ矢石を飛しゝ當砦ゝこも
るゝの一人も残さず討捕らんとの御本意ゝゝゝハ
バ是非おくゝゝ但しゝ當砦ゝこもるゝの元より越前
衆と意趣おくゝゝへバ夫等ゞ首切りてのち快とも

思ひ名すまゝさゆゝとやられバ玄蕃允あゝ黙
然として言もすやうなりてやけゐハ何さま楽山
羽田あゝ云ふ大将ちゆさへよしみもあくうち
みもあゝ増〳〵その餘の人々ゐ於て何の意趣ゆ
あくゆ大将さちゝ出城ゆをんを後めさく追ひ
討ちあんゝすべきゐならゝ然るを餘人の首切て
さらゐ心ゆ〳〵とハ思もゝゆ然バ両大将の出城只
今のゐゝゆゝいづれゐ御定めゆやうけめもり
やべゝと云ゆより基次さんゆその御設を承そり
そのゝち開城退散の時刻をやいれゆべきゐゆと
こさへられバ盛政ちうあつき如何ゐも左なる

べゝさらハ早々立返り退出の次第をやさるべゝ
と云よりゝ又兵衛すゝやゐ砦へ引ろへゝ佐久
間ゝやゝゝかゝむきを告げそのゝち二度佐久間
の陣所ゐいさゝ玄蕃ゆやゝるハ御設のかもむき
を以て楽山羽田ゆやていゆ両人とも玄蕃允殿ハ
武勇ゆ長ゝのゐのゝまゝならゝ世ゐ情厚き人ゆか
ゝゝりゝさらバ我〻二人當砦を立のきやべきゆ
ゆ但ゝ白晝ゆひきのかんとも如何ゆゆ夜ゆ入り
ゆハバ神速ゆ開城仕りゆべくゆ間そのゝち御入
かハりゆへどやていゆと説られバ佐久間玄蕃允聞
終り越前の諸勢をゐつめてやゝるゆゝ匠作のい

むるいとく大岩山より直ちひきかへしてとうバかゝる仕合もなるまじ安井徳山拜郷三人が志きり
ま諫めしてエバを用ひざるハ如何と沙汰せしりの
もなりとしりと覚ゆるゝ玄蕃允が押きつて進み
されバ手もぬらさじ賤がとけの岩をとる得さる
ぞやみよ〳〵一日二日のうちおハ筑前守を生ぎり
て匠作の世とをすべきりと小かどりしてぞ悦
びけり

重修真書太閤記八編巻之三十終

三都書林

三條通升屋町　出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
同　博勞町　河内屋茂兵衛
同　筋木町角　河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
芝神明前　岡田屋嘉兵衛
本石町十軒店　大丁子屋平兵衛
大傳馬町二丁目　和泉屋金右衛門
横山町三丁目　須原屋伊八
浅草茅町二丁目　紙屋徳八
筋違御門外旅籠町二丁目